

中国は味方？－ハリウッド映画の世界

先日、飛行機で移動中に「オデッセイ」という映画を観た。火星探査中に一人取り残されてしまった米国の宇宙飛行士が、多くの困難に遭遇しながらも、水を造り、芋を栽培して何とか生き延び、ついには、仲間の宇宙船に救助されて地球に生還するという話である。いかにもハリウッド映画的なストーリーであるが、主役のマッド・デイモンの演技が上手く、また特撮効果も素晴らしかったことから、睡眠時間を削って見入ってしまった。とても面白い映画だったのだが、ただ、何となく違和感を覚えた。あとで考えてみると少しおかしい。火星の生存者のために食料を積んだロケットを NASA が送ろうとするが、打ち上げに失敗してしまう。そこで支援の手を差し伸べるのが「中国国家航天局」なのである。米国と中国の関係者が固唾を呑んで見守る中、救出劇は成功し、両国関係者が喜び称えあう。実際の国際場裏における米・中関係は、互いを牽制し合う関係なのだが、ハリウッド映画の世界では、両国の友好関係が遙かに進んでいる。どういうことなのか？

興味を持ちインターネットを検索してみると、同様の事例が幾つかあり、私と似たような問題意識を持っている人もいる様である。

- 「レッド・ドーン」(2012 年)：1984 年に製作された「若き勇者たち」のリ・メイク映画であるが、侵略者を中国から北朝鮮へと変更
- 「アイアンマン 3」(2013 年)：悪役の「マンダリン」は、原作では中国の犯罪結社のボスであるが、映画では国籍不明のテロリスト
- 「ゼロ・グラビティ」(2013 年)：ロシアが破壊した衛星の破片が衝突したことから宇宙に放り出された米国宇宙飛行士が、中国の宇宙船「神舟号」に乗り込み生還
- 「ワールド・ウォー Z」(2013 年)：原作では、人類を滅亡させるウイルスの発生源は中国とされているが、映画では、「病原はモスクワ風邪」

さて、何故この様なことになったのか、理由は簡単である。それは、ハリウッド映画界に対する中国の影響力がここ数年で格段に大きくなっているのである。映画市場を比較してみると、2011 年頃に中国市場は日本を抜き、あと 5～6 年で米国に追いつくという。中国マネーが映画界にも入り込み、もはや中国を悪役にしてしまっただけでは、映画産業が成り立たなくなっているのである。映画の中では、今後も次々と中国が悪役から味方へ、更にはヒーローへと変わっていくことになるだろう。これらのことに、中国政府の意図が働いているのか否か筆者に確かめる術はないが、映画の世界では、中国のいわゆる「心理戦」が功を奏していることは間違いない。

今のところ、悪役はロシアや北朝鮮ということになってはいるが、いずれ、反日映画がハリウッドで製作されることになりはしないだろうか。恐ろしいことである。(了)